短編競作感想

しろくま

五月の同行：イコ

この作品の感想というより、まず初めに自分自身の書く感想の傾向は、書き手が何を書きたかったかが分かったかどうか、またその答えとなるものがしっかりと作者にはあると感じることができて、作品を読み込めば分かるようになっているかどうか、ということに多分に左右されます。また「なぜ五月なの？」というようなところもそうで、一つひとつ理由が分からないと頭の中が「？」になります。作品の文章が巧みであればまた厄介です。文章巧みにごまかされていると感じれば、嫌いになってしまいます。

描写の羅列にも思え、まとまっているようでも、芯が分からないから空中分解しているように感じました。独特の雰囲気がある、とまでも言えないし、第一「雰囲気」を狙った作品ではないと思います。言いたいことをちゃんと表現しようとしていて、直接芯の部分を語っているようなのだけど、なんともそれが泡のようでした。描写と概念、それ以外のものが、おそらく読み手を理解させるのに小説として本当に必要な要素なのだろうと、この作品を読んで思いました。白斑は何のメタファーだったのでしょうか。

スイッチ：甲斐 寛樹

文体、改行が多いということからも、純文学ではないのだなと読んでいてまず感じます。純文学ではないことが良くないことにはなりませんが、こちらの読み方として、純文学でなければ単純におもしろいかどうかのエンターテイメントの読み方になります。今回、エンターテイメントの目線から読んだ作品は、本作と「目覚め」「劣情に惑う剣」の三編がありました。

オチがなぞになっていますが、物語の二人だけじゃなく、読み手の僕にもそれが分かりませんでした。ちゃんと答えになるものが作中から見付けられるのでしょうか。どうも書き手の頭にもないように感じられました。ちゃんとした答えがなく投げ出されたような印象だと説得力がありません。「書き手が何を書きたかったのか、答えは何か」が分からなかったので、読後感としてはおもしろくないものになってしまいました。エンターテイメントの作品であるなら、読み手としては分からない話よりも、分かる話のほうがおもしろく感じるのではと思います。

明け方の焔：崎本 智（6）

後半の手紙から『門』よりも『こころ』を連想しました。同じ「告白」ですね。イコさんと同じで文章がこなれていると、読みながら思いました。今回、そう感じながら読んだ作品は、ほかに「親子の敗走」「出来そこないのマリア」がそうでした。それはつまり、自分より力量が上だと感じながら読んだ作品です。

僕自身まだ描写の面で人とは競えず力不足だと思っているので、身の丈以上の凝った書き方は控えているのですが、本作はとても文学的な描写に凝っていると感じました。小説をよく読まれているのだなと思いました。ただ「旭日が山裾から仔馬のように野を走ってくる」は既視感があり、何かほかの小説か映画から持ってきたように思えてしまいました。

物語としては、バックグラウンド、ベースとなる部分がしっかりされているように思えました。しっかり練られて書かれたように想像します。読み終わり、この感想を書くためにまたなぞっていくと、最後の燃え残ったものに自分の母を思っているかな、などと考えも新たに生まれ、読めば読むほど読み返したくなります。練られているからこそ、そこにあると思う、作者が忍ばせたものを見付けたくなります。読書量でしょうか、書き始める前までに費やす労力は裏切らないと思いました。

いざ起て戦人よ：小野寺 那仁

後半になってからも新しい登場人物があったことなどから、おそらく本作が途中で終わったように感じるのだと思います。読みながらの印象では、卒業まで話が続くようにも思いました。この作品も、読み始めて自分より上手と感じていたのですが、どうも最初の喧嘩の場面での状況理解がすんなりいきませんでした。ちょっとゴタゴタしている印象で、地と内言が差無く書かれていることや、改行が少ないことも要因なのかもしれません。

タイトルの「戦人」とは、主人公達のことも指しているのでしょうか。そう連想できるかどうかがはっきり分からず、ただ課題曲の名前でしかないようにも思えてしまいました。そういったところにまだ工夫の余地があるのかもしれません。

目覚め：緑川

二人称の特徴がよく活かされている作品だと思いました。僕にとってこの作品が初めて読んだ二人称の作品でした。二人称で書こうという考えからこの作品のアイディアが生まれたのか、この作品のアイディアから二人称を利用することを思いついたのか。この作品から二人称という手法が生まれたのかなとも思ってしまうくらいです。

エンターテイメントでありながら、ここは文学的要素もあるのかなと、感じさせられる箇所がありました。ただ、それはそう思うだけで分からず仕舞いなのですが、そんなことよりも、エンターテイメントとしてのオチのきれいさにとても楽しめました。あえて注文を付けさせていただくなら、題名が少しさびしく感じられたことです。

劣情に惑う剣：常磐 誠

まず逆接の連続がよくありません。読んでいて不愉快になります。主人公が一番頭が悪く思えました。ある種狙いなのかもしれませんが、狙ったところで狙うまでの目的、価値、意味を疑います。他の登場人物にも感情移入できませんでした。神の目視線というか「本当に頭のいい視線」というのが必要なのだと思います。最後の場面は読んでいて恥ずかし

くなりました。書きたいことは分かります。これを機会にもう一段階レベルアップしていただきたいです。

オレンジの巣：あんな

蟻のような、カマキリのような、昆虫をモチーフとしているのか、或いは『マトリックス』のまだ「目覚め」ていない人間達のような、並ぶ人の繭、そんな世界の想像が浮かんできました。女の人の書く作品なのだと思います。ガチガチの作品群にこういった作品があるとおもしろいですね。

残念ながら作品が理解できたかと言われれば、はっきり理解することはできませんでした。「明け方の焔」と同じように何度も読み返したくなりますが、この作品の場合では、それは、なんだか自分のマゾヒストな部分を呼び起されているようにも思えます。

段落を分ける行の空きが、後半一つから二つになっていました。確認せずに載せてしまいましたが、意図されたものだったのでしょうか。こういった作品では推敲云々でもないのかもしれませんが、作品のあまさを感じるようで残念でした。

親子の敗走：だいぽむ

まず題名から惹かれます。今回の並んだタイトルを見て一番読むのが楽しみでした。

だいぽむさんの文章力にはいつも感服させられています。第一回合評会の時、だいぽむさんの「眼と虫」も素晴らしい描写だったのですが、その時は書き手の書きたいことがはっきりと分かりませんでした。しかし今回はそういった内容も楽しませてもらえました。

寿司を食べたい少年だからと、一々『小僧の神様』を引き合いにしなくていいのですが、読んでいて『小僧の神様』以上に寿司を食べたくなりました。一々描写に唸ってしまいます。話の展開もありきたりなところから一歩外に出ていったので、先が読めそうでありながら読めず楽しめました。

終わり方が意味深なのはなぜでしょうか。だいぽむさんの作品は、なぜかいつも最後が気になってしまいます。

出来そこないのマリア：る

堕落した高校生の主人公、恋愛物、主人公の親も堕落した人間、そういった要素だけで鼻白む思いがするのですが、文章力、そして後半から止めどなく出てくる密なシーンの連続に惹きつけられていきました。必要な部分しか語らない、だからこの量になっているのだとも思いますが、原稿用紙百枚くらい、もっと長く読みたい気持ちにさせられます。

最後の間違いが何を表しているのか読めず、他にもなかなか真意の掴めない部分もあり、読み返すことで僕にもそれが分かってくるのかどうかも分からないのですが、この作品も読み返して探る価値があるように思えました。「出来そこないのマリア」この題名から彼女自身が決して主人公にとって完璧な存在ではないことが表されているようで、どちらかと

いうと主人公よりも彼女を蔑んでいるようでもあり、読後にまた考えさせられます。